

有限会社 家具のあづま

革新的サービス

一般型

紀州桐筆筒製造で培った伝統技術を現代のニーズにチューニング 建築需要の取り込みを狙う

事業内容 時代に合わせた事業展開 伝統技術と最新のトレンドの掛け合わせ

1891年(明治24年)、桐材の販売を目的に創業し、以来100年以上にわたって紀北の地で桐に携わる仕事を行ってきた。

現在の事業は、桐家具(桐筆筒など)の製造・販売だけでなく、机や椅子、収納棚など各種家具の製造も手掛けている。近年は、コップやカッティングボードといった桐を使ったインテリア雑貨を開発し、商品の幅を広げている。流通方法は、桐筆筒などの桐家具は、同社ショールームでの販売に加え、百貨店で開催される催事に出向いて対面販売

を行っている。インテリア雑貨は、まだ販路確立には至っていないが、ノベルティグッズとしてスポット採用されるなど、徐々に実績が上がりつつある。

同社の技術の核となるのが代表取締役の東福太郎氏であり、伝統工芸士の認定も受けているほか、京の伝統工芸新人作品展・最優秀賞など多くの賞を受賞し、その技術力は高い評価を受けている。多彩な技術を自社の職人に惜しみなく伝承し、桐筆筒で培った技術を最新のトレンドと掛け合わせた特徴ある製品を世に送り出している。

補助事業 大工からの仕事を取り戻す新事業計画 建築用大型材料に対応する「パネルソー」を導入

桐筆筒業界全体の営業環境が厳しくなって久しいが、その原因を辿ると、大工(建築業者)が家を建築する際にクローゼットを作っているという事実に行き着いた。そこで同社では、大工から仕事を取り戻すために、伝統工芸士が家一軒の内装工事、家具の製作・備え付けを企画、提案、製造までのすべてを請け負うという新たな事業計画を打ち出した。この計画では、地元の建築業者と連携し、伝統工芸品を手掛ける技術を用い、建屋の内装、家一軒の家具も製作するもので、非常に高い技術が求められる。

また桐筆筒に限らず、家具業界の需要も低迷、低価格の建売住宅の興隆により、腕の良い職人が少なくなっている。こんな時世において、高い技術を継承し、独自性のある住宅を作っていくという観点からも、今回の計画は意義深い。

しかしながら、これまで建築材などの大型のものを加工する機会が少なかったため、長尺物を精度よく加工できる設備を持ち合わせていなかった。そこで、今回の補助事業では、板材・角材を直線切断することができるパネルソーを購入した。



有限会社 家具のあづま

代表取締役 東 福太郎
〒649-6631 紀の川市名手市場278-1
TEL: 073-675-3600 FAX: 073-675-5660
URL: http://www.azuma-kiri.jp

(業種)家具製造業
(創業)1891年
(資本金)3,000千円
(従業員)5人

成果

職人技が必要な工程の時間を創出 新規導入した機械を存分に使いこなす

これまで製材に使っていた家具製作の機械では2m程度までのものしか加工できなかったが、今回、新たに導入した板材・角材を直接切断するパネルソーでは、木板が5m程度までであれば加工できるようになった。また、熟練の職人でも時間を要していた長尺物の板加工がボタン1つで精度よく、短時間で自動加工することが可能となった。従来は、2人~3人がかりで息を合わせながらやっていたことと比較すれば、作業環境はかなり改善したと言える。さらに、今回、導入した機械によって短縮できた時間を職人技が必要な加工工程に当てることが可能となり、全体の生産効率も向上している。

そのほか、パネルソーに合った独自の治具を作ることで、直角のカットだけでなく三角形や多角形のカットも可能

となった。代表取締役の東氏、自らが機械に手を加えることで、機械の馬力も上げており、想定される様々な状況に対応できるようにしている。機械に使われるのではなく、機械を使いこなしているという印象が強い。



今後の展開

木材加工から内装まで自社で手掛けたショールームが完成 需要の獲得とともに後進の育成に注力してゆく

これまで課題であった新規(リフォーム)住宅の内装、備え付け家具、オーダー家具の技術的課題であった加工木材の長さ制限はクリアすることができた。今夏に完成予定であるショールームは、それら加工木材を使った内装をすべて自社で手掛け、自社で製造した備え付け家具、オーダー家具の展示も行う予定である。このショールームから新たな引き合いを得て、受注につなげていく考えである。

同社の事業の柱は「桐筆筒」、「家具」だが、新たに「建築内装」を加えることで、事業を3本柱としていく意向であり、新たな需要の獲得に対して果敢に挑戦していく。

そのような中で、後進の育成にも力を入れる。従業員の技術を高めていくことはもちろん、地元中学生の職場体験をはじめ、外部講師などを請け負い、少しでも多くの人に本物の伝統技術を伝えられるよう努めていく。

